

支配者たらしむるもの

中近世ヨーロッパにおける権力の表出

上山益己

歴史学において、権力や支配のあり方が、文化的・社会的側面から考察されるようになって久しい。V・ターナーやC・ギアツラの文化人類学研究、あるいは政治文化論といった隣接分野から派生したこうした手法は、1990年代前後から歴史学においても政治史に新たな地平を開き、近年多くの研究を生み出してきた。支配を裏打ちする理念や、それを表明する方法、権力を顕示するための場や儀礼といったものが、各々の時代・地域において盛んに研究されている。

ヨーロッパ中近世については、こうした権力の表象についての研究は王権に注目が集まがちであった。しかし、中世から近世にかけてのヨーロッパ世界は、大小の諸権力がひしめきあう社会である。王権、教会、大小の諸侯、都市などの権力が社会の上層に並列し、さらにその下では諸々の共同体や社団などが強い影響力を行使する、極めて重層的な構造をなしている。この多様で多層的な社会のなかでは、自らの地位を確立させるため、それぞれの政治権力がそれぞれに自身の権威を支配領域や周辺世界の人びとに承認させねばならなかった。そこで、本特集では、中近世ヨーロッパの諸権力が、それぞれのレベルにおいて、自らを社会全体のなかでどのように位置づけ、自らを支配者・権力者として受け入れさせるためにどのような手続きを踏んでいたのかを考察する。

研究対象としては中世フランス社会を主要なものとしつつ、ドイツやイタリアの事例も取り上げる。中世フランス王権については、王国の統治者としての側面とは別に、相対的に強大な国家を率いる者として、西欧キリスト教世界全体の中で自らを位置付ける必要があった。竹中論文では、14世紀末の史料を用いて、当時の王権に近い著述家が、そうした枠組みの中でフランス王権をどのように位置付けようとしていたのかを明らかにしていく。いっぽう中世のフランスでは、王権以外に、諸侯たちが大きな政治的・軍事的影響力を王国の内外において行使していた。しかし制度史的な研究では、諸侯たちの支配領域において、必ずしも十分な行政組織の発展などは確認されていない。こうした状況にあって、諸侯たちの権力・支配を支えたものを考察する。上山論文では、中世盛期のフランドル伯家を取り上げ、諸侯家系が、自らのパトロネジの下においた修道院を、自己の権力を誇示する儀礼の場として利用していた様子を明

らかにする。また頼論文では、14世紀のヴァロワ＝アンジュー家の事例から中世貴族の特権の一つであった狩猟に着目し、それを通じて表明・受容される支配階層としてのアイデンティティを論じる。

紫垣論文では、近世ドイツの帝国諸侯を取り上げる。この時期のドイツ語圏では、諸権力がモザイク状に交錯していた上に、新旧教を含む多宗派が混在したため、例えば帝国諸侯であっても、必ずしも人びとから「わが支配者」と認められてはいなかった。諸権力はこうした中で自らの地位を確立する必要があった。同論文ではバイエルン大公の事例を取り上げ、大公について形成される「聖母マリア崇敬」の保護者というイメージと、大公を中心とした社会秩序の創出プロセスの関連を分析する。

森論文は中世イタリアを対象とする。そこでは都市の商人たちが権力の担い手として主役を務めていたが、商業に携わる彼らは、同時代のキリスト教的価値観では蔑まれる対象でもあった。彼らもまた、伝統的なキリスト教社会のなかで「新たに支配者として」認められるべく模索をしなければならなかった。ここでは、14世紀前半のフィレンツェ商人を取り上げ、商人たちの「支配者としての」自己理解と彼らに注がれた視線のありようを考察していく。

以上のように、本特集は、特定の地域・レヴェルの権力に焦点を当てるのではなく、中近世ヨーロッパの権力を担った多様な要素を研究対象としている。こうしたさまざまな対象を取り上げるにより、中近世ヨーロッパ社会の重層的な関係性の中で、諸権力がそれぞれに適した自己顕示の技法やレトリックを案出していく諸相が明らかになるだろう。